

アクティブラーニングによる古典教育

平野 多恵（成蹊大学・教授）

はじめに——なぜアクティブラーニングなのか

本日は「アクティブラーニングによる古典文学教育」についてお話いたします。私自身、小・中学校での教育経験は少ないですが、研究会のテーマが『初中等学校における古典教育』ということで、勤務しております成蹊学園の中学生に教えた経験をご紹介します。これまで取り組んでまいりました古典文学のアクティブラーニング型授業についてご報告いたします。

まず、なぜ古典文学教育にアクティブラーニングを用いるようになったのかについて、これまでの経緯をお話するところからはじめます。2005年、私が専任教員として初めて着任したのは十文字学園女子大学短期大学部（埼玉県新座市）の文学科国語国文専攻でした。現在ではほとんど残っていない教養系の短期大学です。2013年に同じ敷地にある四年制大学と一緒に、十文字学園女子大学文芸文化学科に改組されましたが、私は改組直前までの8年間、短大生に日本の古典文学や古典文化を中心に教えていました。

短大生の多くは、四年制大学に進学する余裕はないものの、いまだき高校卒業は少数派だということで、せめて短大にと考えて進学してきた学生たちです。そのなかで、国語国文専攻を選択するのは、英語や数学は苦手だけれど、国語ならそれなりにできそうと考える学生たちです。

そういう学生に古典文学を教えることになり、実際、教壇に立ってみると、自分が今まで受けてきた知識教授型のスタイルで90分の授業を続けるのは困難だと感じるようになりました。学級崩壊のような状態ではありませんでしたが、寝ていたり、ぼんやりしていたり、心ここにあらずという感じでした。それで、90分ずっと聞くだけの授業は無理だと思って、授業の中でいろんなことを体験できるようにしたのです。最初のうちは、学生にちょっとした課題を与えて紙に書いてもらい、それを次の時間に取り上げて紹介するような素朴なところからはじめました。

やがて2008年に就職委員という職務につき、短大生の履歴書を添削して一人一人面接して就職の相談に乗るようになりました。就職委員になったのはアメリカで金融危機、いわゆるリーマン・ショックが起こった年です。それまでの就職状況が急激に悪化しました。短大を卒業した人が従事してきた事務職は、すでに契約社員が主になり、短大生の就職先としては販売やサービス業の割合が多く、短大の国語国文専攻に入学するのは、どちらかというとおとなしい性格の学生が多かったこともあって、正社員としての就職が極めて厳しくなりました。

そのような中で、履歴書に学校でがんばったことを書く欄に何も書くことがないという学生の現状に向き合うことになったのです。短大は2年間ですから、高校を卒業して1年も

しないうちに就職活動がはじまります。学生たちと面談していると、サークルにも入っていないし、アルバイトもしていない、履歴書に何をを書いていいかわからないという学生が多いことに気付かされました。そうこうするうちに、学生たちが直面する就職活動と自分が教えている古典文学はまったく一致していないし、古典を学ぶことが学生のこれからに役立っていると思えない、自分はいったい何をしているのだろう、何ができるのだろうと悩むようになったのです。

その過程で成果発信型の授業に取り組むようになり、さらには短大の初年次教育のプログラムの作成やキャリア教育のワークショップを企画・運営にも取り組んできました。こうした仕事を通して、社会人経験の豊富な講師を呼んでのキャリア教育は付け焼き刃で、学生が社会に出ていくための力を根本的に養うものではないと気付き、専門教育も含めて日々の授業の中でキャリア教育をしていくことが学生の成長につながるはずだと思うようになりました。

ちょうどこの頃、『大学生のための文学レッスン 古典編』（三省堂、2010）という参加型授業を意識したテキストを編む機会に恵まれて、2013年からは成蹊大学に勤務し、古典文学の専門教育をしながらキャリア教育の根幹にあるジェネリックスキル（生きる力や社会人力、ソーシャルスキルとも）を融合した授業をつくれなかと考えるようになりました。

こうした個人的な問題と時を同じくして、アクティブラーニングの必要性が教育界で叫ばれるようになっていました。さらにファカルティ・ディベロップメント、いわゆるFDの活動を通して、自分の取り組みは学生が能動的に学ぶことを目指すアクティブラーニングだと気付いて、アクティブラーニングによる古典教育を意識するようになったのです。

続いて、どのようなことに取り組んできたのかを具体的に紹介させていただきます。

1 十文字学園女子大学短期大学部での主な取り組み

十文字学園での主要な授業実践は以下の(1)～(4)です。十文字学園での経験は、現在のアクティブラーニング型の古典教育の取り組みを語る上で原点となるものです。このうち(1)(3)(4)は授業報告として文章にしていますので、詳しくはそちらをご覧くださいただけたら幸いです、以下、手短にお話させていただきます。

- (1)「授業報告 「書物の文化」——古典文化の体験型授業(2)」(『十文字国文』第15号、2009年3月)
- (2)全国寺社のおみくじ展示(2007年) — 1年生クラス必修「基礎講読」
- (3)沖本幸子と共著「〈風流〉の実践—古典文化の体験型授業—」 — 2年生演習(『十文字国文』第14号、2008年3月)
- (4)「授業報告 室町時代の和歌占い——古典文化の体験型授業(3) 阪本龍門文庫蔵『歌占』の実践」(『十文字国文』第16号、2010年3月)

(1)は講義の後で実習をおこなうスタイルの授業です。通年授業でしたので、前期と後期にわけてご説明します。

前期の前半は、和本とは何か、書物の起源、和紙の製法と種類、和本の装訂などの基礎知識を講義しました。その後で和本の製作実習ということで、糊で貼り合わせる粘葉装の和本をつくる体験、その次には、糸で綴じる袋綴じ本をつくる実習に挑戦しました。四ツ目綴じなどの和本の綴じ方をまず練習して、それができるようになったら、実際に四ツ目綴の和本を作成します。最後に、和紙の装飾について説明してから、墨流しや箔散らし、雲英引き、下絵などの実習をしました。

後期は、書誌調査の基本を講義した後、実際に書誌調査を行いました。最後は、調査した本に書いてある字を読みましようということで変体仮名を読んだり、自分の名前を変体仮名で書いたりもします。図書館に授業用に使える和本がありまして、その糸をほどいて、それを綴じなおす補修の体験も行いました。

その後、成蹊学園における中高大連携教育の一貫として行なわれた成蹊中学ゼミ（注：大学教員による中学生向けのゼミ）で、この「書物の文化」のダイジェスト版を実施しました。明治時代以前の和本に触れつつ日本の古典文化を体験的に学ぶもので、90分×3回完結の授業です。第1回目は「はじめての和本」テーマで、卷子本から袋綴じ本まで、代表的な装訂の和本を手にとって和本の形態や歴史を学びました。第2回は「和本をつくらう」で袋綴じと粘葉装の本を作りました。3回目は「くずし字を読もう」で、変体仮名の読解の基礎を学んで、自分の名前を変体仮名で書く練習をして、それを自分のつくった和本に記入しました。

この成蹊中学ゼミで実感したのは、古典文学や古典文化を教える場合、同じ素材・題材であっても、短大生向け、中学生向け、海外向けなど、どこまで見せるか、どのように見せるかを調整することで、さまざまな層にアプローチできるということです。

続いて(2)～(4)は、授業の成果を発信する授業です。先にお話したように、十文字学園に着任した当初は、古典文学史や作品講読の授業で学生の関心を高めるような課題を考えて授業中に組みこませる程度でしたが、やがて、学んだことを発信する経験を通して学生が成長できるのではないかと思うに至り、2007年から学園祭で授業の成果を展示するようになりました。

(2)は全国のおみくじを集めて特徴を調べてまとめた展示と、オリジナルおみくじを制作する試みです。1年生向けの「基礎講読」というクラスごとの必修授業があり、クラス担任として関わっていましたので、その授業で実施しました。授業名に「講読」とあるように、当初は古典文学を丁寧に読む授業をしていましたが、学生たちの実情に合わなかったので方向転換しました。学生たちに社寺でおみくじを引いて解説を付ける課題を出し、それをもとに展示を作りました。もちろん、学生が持参するおみくじだけでは、おみくじの多様な個性を紹介できないので、自分が集めていたものを提供した他、私の前任者として十文字学園に勤めていらした植木朝子さん（同志社大）から京都をはじめ関西のおみくじを数多くいただいたおかげで、関東と関西を中心に全国のおみくじを展示することができました。

学生がつくった十文字オリジナルのおみくじも準備しました。学生たちが好きな歌謡曲の一節、詩や小説の一節を選んで、それを基にしてつくったおみくじです。私が提案してやりはじめたのはいいのですが、この授業はクラス必修でした。必修授業というのは難しく、学生のモチベーションの差が大きいのです。35人ほどのクラスでしたが、新米の教

員だったこともあって、クラスをまとめるのに苦労しました。学生が不平不満を言ったり、動かなかったりしたのはもちろん、大事なおみくじが紛失したりもして、終わったときには疲れ切っていました。このとき、必修授業で、このような授業を実施する難しさを実感しました。

とはいえ、学園祭の展示では、それなりの手応えもあって、翌年も懲りずに新しい企画に挑戦しました。それが(2)平安時代の風流行列を再現する授業です。前年の反省を生かし、選択制の演習科目で実施しました。学園祭で展示をするので希望する人だけ選択してくださいと告知したことで、前向きな学生が多くなりました。折しも中世芸能の研究者である沖本幸子さんが非常勤で芸能の授業を担当されていたので、その授業とコラボレーションして2クラス合同で実施しました。中世の祭りに生きていた「風流(ふりゅう)」の精神を学びつつ、現代の風流行列を創作するというもくろみです。絵の得意な学生が昔の祭礼図などを参考にして、現代の妖怪も登場する「現代風流絵巻」を描いて、教室の壁一面に展示した他、龍や御神輿、風流傘などの作り物などを色々と手作りし、学園祭当日には、いろいろな仮装をして大学の構内を練り歩きました。異なるクラスのメンバーが協力しながら非日常の時間と空間を手作りしたという点で印象深い経験でした。

その翌年に行ったのが(3)室町時代の和歌占いの取り組みです。おみくじの展示を経て、おみくじに記された和歌の存在から、私自身が和歌の占いに関心を持つようになりました。奈良県の阪本龍門文庫にある室町時代末期のものと思われる『歌占』という和歌占いの古写本を用いて、実際の占いに挑戦しました。64首ある占い用の和歌に現代語訳と解説を付けて、教室中に展示し、教室の奥に設置した小さなブースで浴衣を着た短大生の占い師が占いをするというものです。無料で珍しい占いが体験できるということもあって、かなりの人気を博しまして、学園祭の2日間で500人ほどの来場者がありました。教室の前に行列もできるほどで、演習を受講していた学生はわずか8名でしたが、一人ひとりが自然に役割分担をしてがんばって、学生の成長を感じる得難い体験になりました。

そもそも、なぜ、このような授業をはじめたかという点、先ほどお話しましたように、就職委員として短大生の就職の面倒を見ていたからです。そのような中で、履歴書に短大での経験を書けない学生たちに多く接して、大学の授業を学生たちの成長の場にしなければいけないという切実な思いを抱えることになりました。いま振り返ってみると、就職活動で苦戦する学生たちを間近で見た就職委員の経験が、こういう授業に向かわせていったのだらうと思います。

2 成蹊大学での主な取り組み

その後、2013年からは成蹊大学文学部の日本文学科に所属する教員として中世文学を主に教えるようになり、短大時代の就職委員のように学生の就職指導を直接求められる立場ではなくなりました。専門分野の研究をする大学教員が、学生の就職を指導したり、イベントを企画して盛り上げたりする必要はないと考える人もいるでしょうが、私自身はこれまでの経験を通して、やはり学生が大学の授業を通して、できるかぎり成長してほしいという思いがあります。

成蹊大学では基本的にすべての授業をアクティブラーニング型で実施していますが、ア

クティブラーニングに基づく成果発信型・課題解決型の授業として、以下の①～④の実践があります。

- ①「天祖神社歌占プロジェクト」大学院生と新しい和歌みくじ創作（2013年～現在）
- ②学園祭でゼミ生による江戸時代の和歌占い「晴明歌占」実践（2013年～現在）
- ③成蹊大学創立者中村春二を題材とした新作講談づくり
半期授業とお披露目会（2015年前期）

「天祖神社歌占プロジェクト」は大学院生対象の授業です。東京都板橋区のとときわ台天祖神社様と協同でオリジナルの和歌みくじ「天祖神社歌占」を作らせていただきました。そちらについては「新しい和歌みくじをつくる一天祖神社歌占プロジェクト」（『リポート 笠間』58号、2015・5）に掲載していただき、笠間書院のブログ http://kasamashoin.jp/2015/05/58_5.htmlでもお読みいただけますので、そちらをご覧ください。

「晴明歌占」は、3・4年生合同のゼミのメンバーが協力して大学の学園祭でおこなっている江戸時代の和歌占いと展示です。十文字学園での経験を通して、いろいろな苦労はあるものの、授業の学びを外に開いていくプロジェクト型授業に意義と可能性を感じるようになりました。江戸時代の版本で『せいめい うた占』という平安時代の陰陽師安倍晴明に仮託した和歌占い本があり、学生に話をすると興味を示したので、その本を基に占いの展示と実践をはじめました。1年目は十文字学園での経験をふまえてかなり指導して、その後、それを改良して学生主体で続けて、いま3年目です（2015年時点。その後、2018年現在まで継続。2016年からは、歌占の他に、お伽草子、『十訓抄』など、その年のゼミで扱っている作品の展示も合わせて実施）。その様子はゼミの facebook「成蹊大学文学部ひらのゼミ」 <https://www.facebook.com/hiramechanzemi> でご覧いただけます。江戸時代の占いが無料でできるということもあって、毎年、2日間で1000人以上の来場者があり、来場者の投票で賞をいただくなど、例年、注目されています。

成蹊大学の創立者である中村春二の人生を題材に新しい講談をつくる授業です。こちらは講談師の日向ひまわりさんのお力添えをいただき、落語芸術協会との産学連携の形で新作講談づくりに挑戦しました。中村春二の伝記や成蹊の学園史などの文献を読み、プロットとストーリーを作ってから原稿を書きました。学生たちがアイデアを出し合うのですが、講談師の日向ひまわりさんにご指導いただきながら、より講談らしくなるように編集や推敲を重ねていきました。半期授業で講談の原稿をつくり、さらに学生たちが講談師として読む練習もして、最後にお披露目会を行いました。ダイジェスト動画 <https://www.youtube.com/watch?v=r1CvIn84ask>や講談の原稿を含む授業報告（拙稿「新作講談「中村春二伝」の誕生」、成蹊大学文学部学会編『人文学の沃野（成蹊大学人文叢書）』（2017年3月））もありますので、よろしければご覧ください。

以上、いまご紹介したのはプロジェクト型の授業ですが、通常の授業も基本的にはすべてアクティブラーニング型でおこなっています。半期授業15回の3分の1にあたる5回ほど

をグループワークなどのワークショップ形式でおこない、残りの3分の2は予備的な事前知識の導入や解説と事後の補足講義やふりかえりにあてています。

基本は、「個人ワーク」―「ペアワーク（あるいはグループワーク）」―「シェア」という流れです。まず個人でワークシートに意見や解釈を書き込み、その後、ペアや3、4人のグループで話し合っただけでシェアします。最後はクラス全体で発表して、教員がコメントしていくという形が多いです。長い作品をいくつか分割して読み合わせるジグソー法や模造紙に発表内容を書いて発表するポスターツアーなども活用しています。

3 日本文学アクティブラーニング研究会での取り組み

十文字学園から成蹊学園に移った2013年に、日本文学の学びと学生の現状について同じような問題意識を持っている同世代の研究者仲間と「日本文学アクティブラーニング研究会」をつくりました。学生たちが日本文学を学びつつ、自信も付けて、さらに社会人も付けて、いろんな大学と交流しながら学びあう場を作りたいということで集ったのが、この会です。

はじめは各自が授業でどのようなことをおこなっているか、就職のことをどう指導しているかなどを情報交換する場でしたが、そのうちに日本文学科には真面目だけれど控えめな性格の学生が多いので、他大学の学生と交流して活性化しようということで、大学合同でワークショップを開催するようになりました。2015年からはじめて、現在までに2回開催しました（注：2018年までに計4回開催）

第1回日本文学ワークショップ（5大学合同）開催、於法政大学、2015年3月

第2回日本文学ワークショップ（8大学合同）開催、於成蹊大学、2016年8月

第1回目は日本大学と東京女子大学・法政大学・駒澤大学と成蹊大学の5大学合同で開催しました。5大学の学生を合計30名ぐらい集めての丸一日のワークショップです。東京女子大学の中野貴文さんが企画兼ファシリテーターで、『伊勢物語』第二段の和歌一首をもとに歌物語を新たにつくり、それを演劇化するというものでした。その内容は『リポート笠間』58号に、日本文学アクティブラーニング研究会編「古典文学をアクティブ・ラーニングでまなぶ―和歌を演じるワークショップ」として掲載していただき、笠間書院ブログhttp://kasamashoin.jp/2015/06/58_7.htmlでも読めますので、よろしければご覧ください。

つい先日、2016年8月には第2回目の合同ワークショップを行いました。今回はさきほどの五大学に千葉大学と昭和女子大学と中央大学、あわせて8大学合同で実施しました。こちらは法政大学の小林ふみ子さんと日本大学の佐藤至子さんが企画兼ファシリテーターで、江戸の見立て絵本から「見立て」の方法を学び、学生にもオリジナルの見立て絵を作ってもらい、解説を書いて発表するという内容でした。

このような取り組みを通して古典文学の新しい教育法を模索しているところです。

4 アクティブラーニングで身につく力

――コミュニケーション力・思考力・理解力・表現力

これまでご紹介してきた取り組みを通して、アクティブラーニングで身につくと実感しているのは、コミュニケーション力・思考力・理解力・表現力の四つです。まず、ペアワークやグループワークを通して自分の意見を言う機会が増えるので「コミュニケーション力」や「表現力」が養われます。さらに、文献資料や課題を把握するための「理解力」、文献資料を読んで結論を導く「思考力」が身につきますし、そこから分析力や判断力も育つと思います。

アクティブラーニング型の授業でよくおこなうのは、ある課題について学生一人で考えたあと、それぞれの意見を持ち寄って、グループごとに話し合っグループとしての意見を決めるというものです。例えば、『今昔物語集』などの説話を読むときには、説話の末尾に付される編者のコメント、いわゆる話末評語を空欄にしておいて、その内容を学生に考えさせます。その後、3、4人のグループで話し合っ、グループで話末評語を一つに決めて発表するというをやります。それぞれ違う意見を書いたり、二つくらいの意見に割れたりするのですが、どれを選ぶかを話し合っ考えるときに、説話の内容を分析して、最終的に判断する力が求められます。

いろいろな文献資料を読んで、考えを書いてから話し合いますから、読む・書く・話す、それから聞いたり質問したりする力も自然と身につきます。今述べたようなグループワークに取り組むなかで、自分の回答よりも他の人の回答のほうが優れているとか、AさんとBさんの意見を合わせたらよいだとか、他者を受け入れたり、多様性を許容したりできるようにもなっていきます。

さらに文学を素材とした教育では、行間や自分とは異なるものを想像する力や、それをベースにして新しいものを創造する力の育成が特徴になるのではないかと考えています。

5 アクティブラーニング型授業に求められるもの

2012年8月の中央教育審議会における答申「学士課程教育の質的転換」で、学生の能動的学修としてアクティブラーニングが指摘されて以来、アクティブラーニングが広く注目されるようになりました。古典文学教育の分野でのアクティブラーニングの実践は、まだ多くありませんが、その普及につれて、アクティブラーニングでは深い学びに至らないという批判が起こり、ディープ・アクティブラーニングの開発が求められています。

たしかに、アクティブラーニングは授業の設計がしっかりできていないと、グループで楽しくやるだけで終わってしまいがちで、従来の知識伝授型の講義に比べると講義を通して知識を得るという機会は少なくなります。そのような批判を乗り越えて、深い学びにつながる古典文学のアクティブラーニング型授業に求められるものとして、以下の六点を考えています。

一点目は「モチベーション」としてのアクティブラーニングです。体験的に学ぶことによって、古典に対する関心を高めることになります。

二点目は「内容への深い理解」です。作品について考えて語り合うことで、作品への理解が深まります。

三点目は「知識の定着と確認」です。アクティブラーニングについて高校の先生方にお

話す機会もありますが、そういうときに必ず聞かれるのは、古典文法や古文単語などの知識の定着や確認をアクティブラーニングでどのように行うのかということです。高校で古文の授業にアクティブラーニングを取り入れている先生ですと、例えば品詞分解を宿題で課し、授業ではその宿題を4人グループで答え合わせをするのだそうです。グループの中で答えの違いや疑問点が出てきたら、まずはグループで確認し、ほとんどが間違えている部分は先生が特に取り上げて解説しているということでした。あるいは、小テストの採点を隣の人と交換してやらせて、そこで間違いが多かったものを先生が解説するなどです。このような実践を聞いて、アクティブラーニングは知識のインプットや定着にも活用できると思いました。

四点目は「学び方の獲得」です。アクティブラーニングを通して、学びの視点や方法というのを身に付けるということです。将来、自分なりに学びたいことを見いだしたときに、自分の力で追求していくための方法、研究に直結しなくても高等教育を受けた人間として身に付けておきたいメタ的視点などを養成していけるだろうと考えています。

五点目は「ジェネリックスキルの養成」です。さきほども申し上げたように、アクティブラーニングを通してコミュニケーション力や思考力や理解力、表現力が高まります。現在、社会に出ていく学生を育てることが学校に求められていますが、まさに現代社会で生きていくために汎用的に必要となるスキルです。

最後の六点目は「学んだことを外に開いていく力」です。授業で自分の考えを発表するというにとどまらず、プロジェクト型の授業で成果を外に発信していくようなものです。十文字学園では短大の初年次教育のプログラムを開発して、その中でグループワークをどんどん取り込んでいました。それが、いまの古典教育におけるアクティブラーニング型授業に役立っているのですが、初年次教育の効果を確認するために学生にアンケートを取ると、学生の多くはコミュニケーション力が高まったと回答していました。ですが、主体性や行動力が高まったかということになると、授業だけでは伸びていけないことがわかりました。やはりクラスなどの日常的な場では甘えてしまうので、外の世界に自分をひらく経験が必要になってくると思います。

6 アクティブラーニングに向いている古典文学教材

さきほど、アクティブラーニングには深い学びに至らないという批判があるとお話しましたが、アクティブラーニングで学びを深めるには教材選びとワークシートの設計が非常に重要です。

これまでの経験から、アクティブラーニングに適した素材やテーマについて、以下のようになっています。まず一つ目は、正解が一つではなく多様な解釈ができる素材。二つ目に古典の世界に参加できる仕掛けです。古典の登場人物や著者・編者と同じ地平に立てるような問いがあると作品の中に参加しやすくなります。三つ目として、自分のオリジナリティーや表現する楽しさを味わえるもの。四つ目は作品の内容に共感できるものです。古典を読んでも、家族が死んで悲しいとか、恋人にふられて悲しいとか、今も昔も共感できる人間の気持ちに触れられるものは作品への関心を高めます。五つ目は、普遍的な共感とは逆に、現代と異なる価値観を含む、つまり異質性を持つものです。社会や文化は時

代によって変化しますので、その違いに触れられると価値観が相対化されて気付きが大きいです。最後は作品の理解が深まる問いやテーマを含むものが、深い学びを伴うアクティブラーニングに適していると思います。

これらの五要素がすべて揃った教材をつくるのは難しいですが、この中からいくつかを満たされた教材ならアクティブラーニングで体験的に学びを深められると思います。

おわりに——今後の課題：研究と教育とつなぐこと

最後に、今後の課題についてお話して終わりにしたいと思います。よく言われることですが、研究の世界では研究対象どんどん細分化していて、自分の研究内容と短大や大学の授業をリンクさせるのは、なかなか難しくなっています。アクティブラーニング型の授業は、学生にあわせて授業を作るので、自分の研究対象を授業で扱うことはしてきませんでしたが、これからは研究と教育とつなぐことが課題だと思っています。

昨今の大学教員は校務が多く、多忙になるばかりで、私自身、これ以上、授業と研究が乖離してくと、どちらも十分な時間がとれなくなることに悩んでいました。そこで、研究と授業をできるだけ近づけようと試行錯誤しています。

たとえば、現在、神仏の託宣歌に関心を持って研究をしていますので、その託宣歌を授業で扱うことにしました。『俊頼髓脳』『袋草紙』『拾遺集』『後拾遺集』『新古今集』などに収められている託宣歌をまとめて学生に示し、折口信夫『言語情調論』に書かれた託宣歌の分析を参考にしながら、学生たちに託宣歌の特徴を分析させました。すべての託宣歌を対象にすると数が多すぎて分析しきれないので、作品ごとに分担して、だいたい一人10首ずつぐらいを分析対象に割りあてます。その後、3人グループになって、それぞれの分担を持ち寄って託宣歌の表現の特徴を分析して、最後にグループで発表するという授業です。つまり、情報を読み込み、その特徴を分類し、そこからさらに原理原則を発見することを目論んだわけです。これは、いわば研究のやりかたをワークに取り込んでみたということです。これをやってみたら学生への反応もよく、レポートや卒論の執筆にも生かせるという手応えを得ました。

このような経験を経て、現在は、高等教育で身につけるべき研究の視点や方法を身につけられるようなアクティブラーニング教材を開発したいと考えています。身につけたい視点や方法としては、要点やテーマを理解する、原典を理解して分かりやすい言葉で言い換える、客観的な根拠に基づいて説明や証明をするというようなことです。ワークシートを作るときに理由を書く欄を必ず設けるのですが、そのようなワークを積み重ねることで基礎的な思考力が身につくと思います。

さらに、その時代の意義と現代における意義の関連や、他作品や時代・ジャンルを関連付けて全体像を把握するということがあります。関係図などを図示するのも、よく行うワークです。俯瞰する力を付けて、具体化と抽象化の往復ができるようになるとういと思います。こうしたことを通して、ものごとに対する批判的、複眼的、個性的な視点を身に付けて、仮説とか問題が発見できるようになればよいと考えているところです。

以上、私がこれまで取り組んできたこと、それから今後の課題だと思っていることをお話いたしました。ご清聴ありがとうございました。